

園芸サービス業

実はここにも、緑と花を届けています ～百貨店をはじめとした、まち全体の緑と花のサポーター～

7-2 株式会社 竹中庭園緑化

観葉植物のリースからブライダルまで幅広く

大阪府東大阪市にある株式会社竹中庭園緑化は、明治25年に創業した造園業にルーツを持つ会社である。その後、造園業に加えて、植物や花を企業のオフィスや店舗に貸し出すリース事業を展開してきた。そして昭和52年に、そのリース事業部門が独立して発足したのが、竹中庭園緑化である。

現在は、植物や花のリース事業を中心に、90年代から展開しているフラワーショップ「hanna」や、ホテルブライダル、平成21年にはフラワースクールを開講するなど常に新たな事業展開を見せている。

同社の事業では、「竹中庭園緑化」という名前は直接的に出ないものの、関西地方を中心に、近鉄百貨店をはじめとした百貨店やダイヤモンドシティといったショッピングモール、なんばパークスなどの店舗内やディスプレイを華やかに飾っている。



本社

業界で働く者として取得して欲しい資格

「当社では15年から20年くらい前から技能検定の受験に力を入れています。この業界で働いているからには、技能検定の1級に合格して欲しい。そのような考えから、研修にも力を入れています。」と、総務部長の野中氏は答えてくれた。

同社の本社を訪ねてみると、軽自動車を多数見ることができる。普段の業務では軽自動車に乗って、それぞれの持ち場に分かれて顧客先で植物や花の手入れや交換等を行なっている。社員が顧客先で行う業務のため、普段はなかなか他の社員の仕事ぶりを見るのが難しい。会社としては他の社員や他社の社員が作るものを見て、相対的な自分の位置を知るためにも技能検定を受けて欲しいと考えているようだ。

現在は、社員210名のうち、園芸装飾技能士1級22名、2級4名、フラワー装飾技能士1級4名、2級4名の検定合格者を輩出している。

地元、関西の技能グランプリで優勝！

竹中庭園緑化が技能グランプリに出場したのは、10年ほど前からだという。その頃は、園芸装飾職種の技能グランプリは関西企業の参加が少なく、出場を頼まれたのがきっかけだった。まだ、この頃は同社も技能グランプリ出場の条件である1級技能士の社員が少なかったが、出場可能な限り社員を派遣してきた。

そして平成21年に神戸で行われた第25回技能グランプリには今回取材した黒見氏はじめ3名の社員が出場した。地元開催のプレッシャーの中、3名全員が優勝、準優勝、敢闘賞を受賞し、地元関西で素晴らしい成績をおさめることができた。



技能グランプリの開催風景

研修と技能検定の一体運用による人材育成

同社の研修は、技能検定と密接な関係にある。同社の社内では年間を通じて初級編と中級編の実務研修が開催されている。そして、この実務研修のテストで合格しないと、技能検定を受検できない仕組みとなっている。

例えば2級を受検したい社員は、初級編の研修を受講しなければならない。そして、さらに研修内で実施されるテストで8割以上の得点を取れないと技能検定を受検することはできない。同様に、1級を受検したい社員は、中級編の研修受講、テストで合格して受検することができる。もちろん、この研修内で実施されるテストは技能検定より難易度の高いレベルでかつ実技も充実したものになっている。そのため、近年同社では2級を飛ばして1級を受検し、合格する社員が多いという。

株式会社 竹中庭園緑化

➢業種: 園芸サービス業
➢住所: 大阪府東大阪市
➢代表者: 竹中照次

➢設立: 昭和52年
➢従業員: 210名
➢技能士: 34名

技能士へのインタビュー

黒見 英之氏(37歳) 1級園芸装飾技能士



業務内容が様々で、泥臭い仕事と聞いて

今回紹介する技能士は、グリーン事業部マネージャーの黒見氏である。黒見氏は入社13年目で、これまで主に、グリーン事業部で百貨店等の店舗内にある植物や花の管理、ディスプレイの装飾等に関わってきた。大学時代のお話を伺っていると、商経学部にも所属、野球に打ち込んでいた学生時代だったという。一見、花や植物とあまり関係なさそうな学生時代に見える。そんな黒見氏が入社を決めた理由を、「植物・花のリース業やフラワーショップなど様々な事業展開をしていることと、泥臭い仕事だと聞いて、野球をやってきた自分には向いているかなと思ったんです。」と答えてくれた。

同じ材料でも、作る人によって全く違う

黒見氏にとって園芸装飾の魅力は、「(技能グランプリ等のように) 同じ材料や課題を与えられても、自分の力でいろいろなものが作れる。その過程も面白いし、完成したときの達成感が魅力ですね。」と答えてくれた。

技能グランプリの作品を見ても、同じ材料や1つの課題で、ここまで多様なものができあがるのかと驚く。

黒見氏が優勝した第25回技能グランプリにおける園芸装飾の課題は「和」。黒見氏はこのテーマを聞いて、開催地神戸が港町であることと、開催時期が3月で春先であったため、「船出」をテーマに作品を作ろうと考えたという。彼の作品は、中央に竹でできた大きな帆のある船が、海をかき分けて力強く進んでいこうとしている。同社で惜しくも2位になった内田氏は同じ和でも「未来への架け橋を和で飾る」とこれもまたインパクトのある作品である。

技能グランプリの作品1つとっても、テーマから発想されてでき上がるものは多様であり、その過程も含めて自由に作り上げることができる。これが園芸装飾の魅力のようだ。



黒見氏優勝作品「春の門出を和で飾る」

全社員で乗り越えるクリスマス

同社が一年の中で最も多忙な時期が冬であり、正月の門松やクリスマスツリー等の出荷準備で大忙しである。特に、一年で最も多忙な日がクリスマスである。私たちはなかなか気づくことがないが、同社では25日の店舗閉店後から26日の朝には百貨店はじめ街全体のクリスマス装飾を、お正月の飾りに変えているという。一晩で非常に多くの顧客先を回るので、飾りの片付けなど簡単な作業は管理部門の社員が手伝うなど、全社員総出であたっているという。多くの店舗を回るため、顧客先の開店時間ぎりぎりまで作業をしていることもあるという。

このような厳しい業務を続けることができる理由はどこにあるのか。黒見氏は、「このような辛い業務ではありますが、常に4~5人のチームで動いており、チームで助け合って業務を行っているのだからなんとかやれているのだと思います。」とチームの大切さについて語ってくれた。



クリスマス装飾

今後は、後進の指導をしながら新たな道も

今後の抱負については、「同じチームで後輩と一緒に仕事をしているともう負けてしまっている部分もあるが、自分の腕を磨きながら後輩を指導していきたい。また、造園など違う分野の知識や技能も身に付けて、自分の武器にしていきたい。」と、後進の指導に加えて造園などの異なる分野への挑戦も考えているという。

一方で野中氏は隣で、「黒見のような者は今後、今身に付けている腕を持って、もっと営業部隊として外に出て行って欲しい。未開拓な分野はまだまだあると思っているので」と黒見氏への会社の期待も非常に大きい。